

- 解説 小松史生子(金城学院大学教授)
- 体裁 A5判・上製・総約320頁
- 巻末に解説・総目次・執筆者索引を付す
- 定価 本体18,000円+税
- ISBN978-4-908976-66-7
- 推薦 新保博久(ミステリ評論家)
- 石川巧(立教大学教授)



- 主要執筆者
- | | | |
|--------|-------|--------|
| 飛鳥 高 | 島田 久平 | 永田 力 |
| 天城 一 | 白石 潔 | 西田 政治 |
| 江戸川 乱歩 | 城 昌幸 | 水谷 準 |
| 大河内 常平 | 瀬島 好正 | 三橋 一夫 |
| 大下 宇陀児 | 岡田 鮫彦 | 森下 雨村 |
| 香住 春吾 | 武田 彬光 | 山田 風太郎 |
| 香住 春作 | 角田 武彦 | 山村 正夫 |
| 香山 滋 | 榊 実 | 横溝 正史 |
| 川島 郁夫 | 中尾 進 | |

◆ 三人社ミステリ雑誌シリーズ ◆

獵奇 復刻版

- 獵奇社刊「1928年〜1932年」
- 巻数 全6巻
- 監修 浜田雄介
- 解説 小松史生子
- 付録 『探偵・映画』創刊号・11月号
- 体裁 A5判・上製 総約2,430頁
- 挿定価 本体120,000円+税
- 既刊【残部僅少】

黒猫 復刻版

- イヴニング・スター社刊「1947年〜1949年」
- 冊数 全11冊・別冊1
- 監修 浜田雄介
- 解説 石川巧
- 体裁 B6判・並製 総約900頁
- 定価 本体45,000円+税
- 既刊

妖奇 復刻版

- オールロマンス社刊「1947年〜1952年」
- 巻数 全21巻・別冊1
- 解説 石川巧
- 解説 浜田雄介
- 体裁 B5判・上製 総約7,000頁
- 挿定価 本体378,000円+税
- 刊行中

半七捕物帳 初出版 集成

- 「1917年〜1937年」
- 巻数 全6巻・付録つき
- 解説・解題 浅子逸男
- 体裁 B5判・上製 総約2,050頁
- 挿定価 本体132,000円+税
- 既刊

- | | | |
|-------|-------|------|
| 閻魔大王 | 江戸川乱歩 | 野村胡堂 |
| 四天王 | 延原謙 | 西田政治 |
| 五官大王 | 大下宇陀児 | 水谷準 |
| 阿修羅大王 | 森下雨村 | 城昌幸 |
| 同人 | 香山滋 | 香住春吾 |
| | 武田武彦 | 高木彬光 |
| | 山田風太郎 | 三橋一夫 |
| | 白石潔 | 島田一男 |
| | | 島久平 |

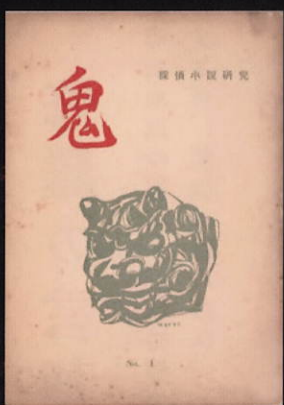
復刻版

発行所 鬼クラブ

1950年〜1953年 全9号

探偵小説研究

鬼



「諸君、日本の探偵小説は江戸川乱歩が死んだら消へてしまふぞ」

「鬼」の旗幟のもと、気鋭の戦後新人作家が集った。ミステリの未来を憂う若者たち。彼らの情熱が生んだ探偵小説研究誌！戦後本格探偵小説の牙城が今蘇る！

- ◆ 解説 小松史生子(金城学院大学教授)
- ◆ 定価 本体18,000円+税
- ◆ 推薦 新保博久・石川巧

2018年6月刊行

三人社

三人社

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369

ご注文は書店様または直接上記までお申し込みください。

●表示はすべて税別

二十世紀だからこそ読みたい敗戦から数年後の息吹き

新保博久（ミステリ評論家）

日本のミステリ史を繙くと、そのときどきの二項対立で語られることが多い。いわく健全派（甲賀三郎）vs. 不健全派（江戸川乱歩・小酒井不木）、本格派（浜尾四郎・大阪圭吉）vs. 変格派（夢野久作・小栗虫太郎）、敗戦を経て、本格派（乱歩）vs. 文学派（木々高太郎）、本格派（横溝正史・高木彬光・鮎川哲也）vs. 社会派（松本清張・水上勉）、新本格（島田荘司・笠井潔・綾辻行人）vs. 冒険・ハードボイルド（北方謙三・大沢在昌・逢坂剛）……。

そうした単純化は分りやすい反面、作家同士・作品個々の細かい綾を蔽い隠してしまいかねない。実際には同志のなかにも反目があり、敵陣営（？）との間にも個人的な交流があったし、本格派でも社会派的な作品に手を染めることもあった。そうした時代の息遣いを肌で感じるには、当時の出版物に触れるのが一法だ。さらに言えば、体裁を繕ってしまう商業誌でなく、本音の語られやすい同人誌なら申し分ない。

もちろんアマチュアの繰り言ばかり読まされては堪らないが、『鬼』は文学派

に対して本格派の牙城たるべく、高木彬光・島田一男ら人気作家が身銭を切って、基本は大真面目ながらユーモアも忘れず、賑やかに探偵小説観を開陳した。山田風太郎・香山滋ら、本格謎解き派といわれると首を傾げる顔触れが混じっているのもご愛嬌で、このへんから往時の人脈相関図に想いを馳せても興味は尽きない。

そうしたマニアックな関心を懐く好事家だけに留まらず、彬光・風太郎らの共同ブログに、江戸川乱歩や横溝正史らが折々コメントを書き込んでいたようなものだと知れば、一般のミステリ・ファンもアクセスせずにはいられないだろう。はしなくも今日のSNS全盛に先駆けたような言いたい放題の饗宴は、いま二十一世紀を生きる私たちを待っていてくれたかのような。

昨今のミステリは何だかつまらなくなつた、技術は向上したかも知れないが、昔のような作家の情熱を感じる事が少なくなつた——そんな想いに共感してくれるあなたの書架や枕頭に備えれば、この復刻版は、かつて探偵小説の魅力を教えてくれたのは何だつたのか、思い起こさせるよすがとなるに違いない。

修羅の言葉

我等は地獄の鬼なり。本格探偵小説を愛し、読み、創作する者、閻魔の廳に集ひ、こゝに諸々の亡者に告ぐ。

探偵文學史上の大鬼才、ボーによつて創始され、幾多の鬼才によつて繼承發展せる、本格探偵小説は、赫々たる成果を展開しつつ、こゝに一世の歴史を経たり。

我等は、更にこれを發展擴張、二十三世の未來まで、「鬼」の旗幟のもとにこの傳統を繼承し、本格探偵小説の牙城を永遠の未來に向つて守るとともに、妄語威をおかせる亡者どもは、淨瑠璃の鏡に照して、これを糾明、八寒地獄より火炎地獄の奥底へ追ひ散らし、八十六億九萬三千二百五十一年の責苦にあはせんとするものなり。

地獄なければ、天國なし。
これを我等の修羅の言葉とす。

内容見本

鬼 探偵小説研究 1950 No.1	
目次	次
題字・江戸川乱歩	表紙・村上松次郎
探偵小説のブルジョア性……白石 潔 2	「鬼」には聲があるか？……水谷 準 9
善鬼、悪鬼……江戸川乱歩 3	推理小説廢止論……香住 春作 10
双頭人の言葉……山田風太郎 4	處女地……島 久平 11
推理小説とは何ぞや……高木 彬光 6	小鬼の寢言……三橋 一夫 13
無題……城 昌幸 7	無題……横溝 正史 14
無題……西田 政治 7	四ツの處女作……島田 一男 15
私のエンマ帳……香山 滋 8	編輯後記……武田 武彦 16

「運動」する同人誌

『鬼』は、戦前から活躍していた江戸川乱歩、野村胡堂、大下宇陀兒、森下雨村らを「大王」と仰ぎつつ、彼らを超越しようとした若者たちが企てた野心あふれる雑誌である。そこには、香山滋、高木彬光、山田風太郎、島田一男といった戦後の探偵小説界を担う逸材が名を連ねている。

『鬼』の特異性のひとつは、同人誌が単なる探偵小説雑誌ではなく、探偵小説のモチーフ、歴史、方法を分析的に語る「探偵小説研究」雑誌だということである。最終号となるNo.9の特集をはじめ、一部には創作も掲載されているが、すでに第一線で活躍しているプロたちが様々な角度から探偵小説の可能性を追究する姿勢にこそ本誌の魅力があるといつてよいだろう。

また、同人誌は出版社がより多くの読者に流通させることを目的とする商業誌ではなく、同人が年会費を払って発行する同人誌である。編輯兼発行人も当番制となっており、各号ごとにそれぞれの個性が際立っている。創刊号の「編輯後記」

石川 巧（立教大学教授）

を書いた武田武彦が、「同人誌というものは一つの運動なのだから、何もサロンでかしまつてゐるばかりが「鬼」の精神ではない。少し位のヒステリックな感情も愛する人にして当然見せたい真実だ」と記している通り、『鬼』は戦後探偵小説界に新たな「運動」をもたらすことを模索しているのである。

自ら雑誌の題字を揮毫した江戸川乱歩は、こうした新しい書き手たちの奮闘に目を細め、編輯部からの求めに応じて力のこもつた論説、随想を提供した。No.5の巻頭言「鬼のかたこと」（無署名）には、「在京同人等、時に大王が幻影城に招ぜられて風論談発、時に「菊正」なんぞと称する娑婆の酒肆に集いて意氣軒昂、膝ならぬ角を交えて内外の探偵小説を切りまくる。またたのしいかな。」という言葉が躍っているが、その気炎は『鬼』の隅々に行き渡っている。

同人誌の復刻によって日本の戦後探偵小説の光源が明らかになることを期待する。

